
蒼生のレジェンディア

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼生のレジエンディア

【Nコード】

N8540L

【作者名】

帆立レノン

【あらすじ】

かつて世界は繁栄の絶頂にあった。魔法と科学その二つの融合「魔科学」と呼ばれ、その技術によって世界は未曾有の繁栄を向かえたのだ。だがある時突然滅んだ。神の裁きかそれとも自滅か解らぬまま終りを迎えた。

そして数千年後　ロストテクノロジーと化した「魔科学」その一端である「魔装具」と呼ばれるものが、古代遺跡から発掘される。魔力のある人にしか使えないが、その凄まじい力に人は再び虜にな

る。
人は再び過ちを繰り返すのだろうか…

あおのゆめ（前書き）

「蒼生のレジエンディアについて」

どうも。帆立レノンです。緋色と同じ世界観、同じ時系列です。違うサイドから語られる伝説で、番外編と言う訳でも無いです（どっちかと言うとこっちが本編？）

両方見る事で全ての真実がわかる……そんな物語が書きたかったんです。

同時進行して行く予定なので、緋色と蒼生セットでお読みいただけると光栄です。

では、前置きが長くなりました。蒼生のレジエンディア〜あおのゆめ〜。蒼い伝説はもう始まっている。

あおのゆめ

プロローグ「あおのゆめ」

私は、幸せだった。

からっぽだった私を。

道具だった私は。

笑う事を知った。

楽しい事を知った。

うれしい事を知った。

泣く事を知った。

寂しい事を知った。

悲しい事を知った。

みんなみんな教えてくれた。

世界はこんなに綺麗だった。

最初からこうなる事は分かってた。だから、泣かないで

私は……今、幸せだよ。私きつと心から笑っているから……

最後は笑顔でいたいから

だから……みんなも笑顔で……

古からの物語。蒼く生まれた少女は古より始まる。

蒼生の伝説は既に始まっていた。

第一話「蒼い使者」

「さて……困った……」

金髪の少年は呟く。端正な顔立ちだが、その表情にはイマイチやる気がない。

アルフレッド、基本的に親しい者はアルフと呼ぶ。本名は長いので

ここは割愛する。自称さすらいのトレジャハンター。今日もまた、遺跡を探索していた。

不測の事態とは、目の前に蛇型の機械獣が居る事だ。

機械獣。古来より人の敵。クラス分けされているのだが、Sに近づく程強くなるが、目前にいるのはDくらいだろう

「……まだ……気付かれてないか……」

だが機械獣の前には、いかにもと言う扉がある。守護なのだろうか。「………いや。やるか！起動！」

彼がそう言うと、アルフの身の丈ほどの槍が現れる。まがまかしい外見の魔装具だが明確な銘はない。正確にはあるのだけどアルフは知らないだけだ。銘を知らないれば、性能は殆どと言っていい程引き出せない。名は意味なのだから。

「はぁ！」

恐らくは心臓部に魔槍を打ち込む。が

ぎいん！

金属音と共に弾かれる。

「かってえ……うお！」

慌て下がる。機械獣が鎌首をもたげ襲ってきたのだ。

「槍じゃ駄目か……なら……」

魔槍を一旦しまう。本来魔装使いは、魔装具を一つしか扱えない。使えないと言う訳ではないが、扱いきれないのだ。一つの魔装具でも馴染むまで、そして武器として使い熟せるまで時間と労力がかかる。故に、一つの魔装具しか使わないのがセオリーだ。だが、アルフは服の中あらゆる所に魔装具を仕込んでいる。アルフは数回使っただけで、その特徴を掴むのだ。全ての性能を引き出せていないので、器用貧乏なだけとも言えるが。

「………起動！」

次に現れたのは、身の丈程のハンマーだ。機械獣が尻尾を振るう。

アルフは飛んで避け、

「よっ！」

機械獣の頭部に思いきり殴りつける。

「…………ギイ……！」

「げっ」

ぎよろりと機械獣の目がアルフを向く。手応えはあまりない。

「仕方ない…………アレ使うか……」

黒塗りの手袋を両手に嵌める。

「起動…………アラクネ」

初めて銘のある魔装具。手袋の全ての指先に金属の爪のようなものが生える。

「……つて！うお！まだ準備中……！」

だがそんなアルフの苦情は、受けつけず襲いかかる。逃げ回るアルフ。

「…………つうお！やべ」

行き止まりに追い詰められたアルフ。アルフに狙いをつけ機械獣は襲いかかるようにする

「…………なんてな」

だが機械獣は、時間が停止したように動かなかった。

よく見れば、目を凝らせば見えたかもしれない。無数に張り巡らされた糸が。糸を辿るとアラクネと呼ばれた漆黒の手袋から伸びていった。

鋼糸使い。微細で繊細な指先の動きだけで、糸を操る。ミリ以下の数字の指先の動き、端から見れば僅か震えてるようにしか見えないだろう。

アルフは逃げ回ると見せかけ、糸を張り巡らせていたのだ。さらに魔力で強化された糸は、機械獣すらも拘束出来る。アルフの器用さはもはや逸脱している。

機械獣は動かない。

動けない。

「アラクネはあまり使いたくはないんだがな…………」

鋼糸術は本来、拘束術だ。だが糸は魔力を込めれば込めるほど威力

は増す。

全てを斬断する系。それは機械獣であつても例外ではない。

「……上げつないからな……」

僅かに小指を震わす。

バラバラにバラバラと次々にバラバラに機械獣はバラバラに解体された。

「さて……」

先程の扉の前に立つ。扉に手をかけ、右にスライドさせる。ぎぎぎと鈍い音がして徐々に開く。

「……………」

古く、ボロボロになった何かの研究施設のような。数千年前は立派な施設だったのだろうか。

「……なんだここ？……」

透明なガラスの大きなカプセルのようなモノが並んでいた。全てのモノに液体が満たされていた。

(……気味が悪いな……)

一体何が、ここで行われていたのだろうか。

そして、一つのカプセルの前で止まる。

「……………！」

目に入ったのは……蒼。蒼い蒼い少女。見とれてしまった。一つのカプセルに液体が満たされたカプセルに人が収まっていた。見方13〜14歳の少女。蒼い流れるような髪。たゆとうように生まれたままの姿で居た。

「……………」

「……………待っていた」

「……………え？」

「……………ずっと」

唐突にガラスが割れた。少女を受け止める。

まるで、それが当然かのように

。少女の身体は温かく、生きている

「……………ケホッ！ゲホッ……………」

咳込む少女。

「……………」

この子は一体？そう思っていると、

「っ！」

地面が揺れる。先程に戦闘の衝撃か、遺跡が崩れそうになっているのだ。

「……………とにかく脱出しなきゃ……………」

少女の背中に抱える。

「……………つと！マジかよ……………！」

目の前には、先程の機械獣がさらに二匹居た。

「ギィ！」

「マズいな……………」

（……………崩れそうな場所アラクネは使えない！）

（だが、他のは……………）

（……………アレは……………使いたくないんだが……………）

（いや……………迷ってる場合じゃ……………！）

少女が、アルフの背中から降り、前に出る。

「っおい！危ないって！」

「……………まもる……………」

少女が右手を前に突き出す。右手に蒼の魔法陣が展開する。

「起動……………『終極の羽根』 ジャッチエンド」

淡い蒼い色の翼が少女の背中に生える。そして、

「……………！」

羽根が舞う。

「ギィ？」

そして、羽根の一つが機械獣に触れる。

「 なっ? 」

何の爆発もなく、何の前触れも無く、機械獣の頭部が消失した。機械獣の体が羽根が触れる度に、消えていく。遺跡には影響は全く、無い。

数分後 何の痕跡も残さず機械獣は消失した。

この世から消失した。

(……何だ…今の?)

(消滅した?)

(この娘は……一体?)

右手の魔法陣が消え、少女の翼も消滅する。少女は、ゆっくりと倒れそうになる。

「 っと 」

アルフは少女を支える。

「 大丈夫か? 」

返事は無いが、呼吸はある。どうやら気絶しているようだ

「 おっ 」

ついまじまじと、少女の顔を見てみる。美少女だった。純粹無垢な印象を受け、笑えばとても魅力的だろう。

「 おっと…早く脱出しなきゃな 」

再び少女を抱え、走り出す。

脱出後。しばらくして遺跡は崩れる。数千年の歴史は呆気なく終わりを向かえた。

「 あゝあ……後でアイツに説教されるな… 」

説教どころの行為ではない事(国家犯罪だ)を仕出かしているくせに、反省の色はない。

「 さっ… 」

マントに包んで寝かせている少女を見る。

少女が何故あんなところにいたのか? 少女のあの力は何なのか? 少女は何者なのか?

疑問尽きないが…

「面倒な事になりそうだな…」
面倒事の嫌いなアルフにしては、言っている事とは裏腹に笑みを浮かべていた。
嫌な予感がしても、少女が何者だろうとアルフは少女を見捨てるという選択肢は論外だった。
世界の命運がここで決まったなど誰が予想できただろう。
蒼い伝説はもう始まっていた

第二話

第閑話「月夜の誓い」

王都ファルセル付近。高台。月き明かりが、優しく降り注ぐ。

そこには二人の男女。男の方は、金髪の端正な顔立ちの少年で軽装の鎧を纏っていた。もう一人は幼い少女。その年でもう美しい大人びた顔をしている。豪華なドレスではなく、質素で素朴な純白のドレスだ。

少女の美しい瞳には、涙が溜まっていた。

少年　アルフレッド・ウィンドバイズ・E・ファルセル。ファルセル王国の第三王子だった。第三王子ともなると、疎まれるものだ。王家の政権争いや、兄とのしがらみが嫌で、彼は王家を出た。

そうすれば、親父も兄達も都合がいいだろうとアルフは考えたのだ。それだけでなく、自由に憧れたのもある。

「アルフお兄様……………本当に行かれるのですか？」

「ああ……………僕が居ても邪魔になるだけだ」

「……………そんな事はありませんわ！お父様は　！」

「それも分かってる。だが、表向きには、勘当されたようなモノだ。だったらなお、僕はいない方がいい……………第一元々俺には向いていないさ」

「……………お兄様ご自分で決められた事です。いまさらですわね……………」

「済まない……………エリス…兄さん達を頼む」

「道中…お気をつけて……………セツナさんがいらしゃいますし、そこは大丈夫ですね」

「……………アイツ、本気でついてくるのか……………」

「仲良しですものね！」

「勘弁してくれ……………」

「一つ……約束をして下さいまし」

「何だい？エリス」

「辛くなったり、寂しくなったら必ず帰ってきて下さい。そして、アルフお兄様なりの『答』を見出だした時、必ず城にお戻り下さい」

「……ああ！約束だらフェリスティーヌ……僕は『答』が見つければ必ず戻ってくる！」

「それと……これを」

「これは……綺麗なペンダントだな……蒼い……」

「お守りがわりですわ……アルフレッドお兄様さま。旅路に天のご加護がありますように」

「ありがとう……それじゃ……行ってくるよエリス……」

そう言って少年は旅に出る。少女は見送る。見えなくなってもずっと見つめていた。

「……お兄様……ご慕いしております……必ず……」

涙に濡れ、後半の台詞は風のようにはかなく消えた。

遠いの約束……それはまだ果たされていなかった。

第二話「刹那の太刀」

「……」

アルフ軽装の鎧からペンダントを取り出し眺めていた。淡い蒼色を放っていた。

「……エリス……俺は……」

少女を見る。ゆっくりと寝息を立てている。

「ああ……！！」

甲高い声が辺りに響く。もちろん、アルフでも、少女でもない。遺跡跡で休んでいたアルフは露骨に顔をしかめる。いかにも聞きたくない声を聞いたと言うように。

「……うあ……追い付いてきたか……」

嫌そうにアルフは呟いた。

「見つけましたあ！見つけましたよ！アルフさま！」

そい言いながら、アルフに近づいてくる黒髪の少女。髪は少し短く、その顔は子供っぽい活発な印象を受ける。人懐っこい笑顔を浮かべている。服装はあまりこの辺りでは見かけない装束で、東方の地域の服らしい。腰には刀が提げられていた。

「……はあ……」

大仰に溜息をつくアルフ。

「なんです？その顔は？いかにもたこにも鬱陶しい奴が来たなあつて言う表情は！心配したんですよお！？」

「アンタに心配される筋合いは無い……… ったく…アンタも暇だな…んなどころまで追つてきやがって………」

「はわあ！？酷いですよお！私がどれだけ心配したと………それに暇だった訳でもないですう！」

「………別に親父の命令って訳でもないんだよな」

「ええ！もちろんです！私は私の意思でアルフさまの護衛をしています！何故なら」

「………」

誇り高そうに胸を張る少女。この次に、黒髪の少女から飛び出す台詞を予想し、本当に嫌そうにアルフは盛大に顔をしかめる。

「何故なら、このセツナ・キリジョウは、アルフさまの幼なじみ謙お世話係謙師匠謙護衛謙そして、アルフさまの忠実で下賤で卑しい取るに足らない従僕ですから！」

セツナ・キリジョウは、本当に誇らしげにそう言った。

「アルフさまおわす所に私在此り　私の意思はアルフさまの為、私の軀はアルフさまの」

「俺は、アンタを従僕と思った事はねえよ……俺はアンタのそういう所が嫌いなんだ。それにアンタに守られる程弱いつもりもない」セツナの口上を遮りそう言った。

「おやゝ言いますねえゝ。アルフさま、私に一度たりとも触れた事

ありましたっけ？」

「うっ」

こう見えてというか、このセツナと言う少女は、魔装使いでもないのに無敗の剣豪だ。そもそもアルフの剣技はセツナに教わったものだ。十年年近く、彼女の剣技を見ているが、一度たりともその剣閃を見えた事すらない。

「それより……ですっ」

「なっ……俺のプライドをどうでもよさげに扱うな！」

「アレですよ！アレ！遺跡……壊れちゃってるじゃないですかあ！？一体何したんです！？」

「あゝなんかちよつと暴れたら壊れた」

「国家レベルの遺産なのですよ！基本は立ち入り禁止だったはずですよ！はっ。見張り施設の警備兵が気絶してたのもアルフさまの仕業ですわねっ？」

「しゃーないだろ？素直に通してくれなかつたんだからな」

警備熱心な警備兵には、疲れがとれるようにお休みさせてあげた。

「ううゝこの事が、リイゲルさまにばれたら……怒られるのは私なんです！」

「いや……怒られるじゃ済まないと思うぞ」

下手をすれば死罪である。

「全く……アルフさまはもう少し王族という自覚を持って下さいアルフレッド・ウィンドバイズ・E・ファルセルさま？」

「……アンタには言われたくない」

アルフレッド・ウィンドバイズ・E・ファルセル。それがアルフの本名だ。第三王子が旅に出たという話題は確かに、一時期民衆の騒ぎとなった。だがそれも一時期だけ、顔も名も余り知られていなかったアルフは、すぐに忘れられてしまったのだ。

かの人がこんな辺境で、宝探しをやっているなど誰か気付くだろう。

「第一……なんで俺に仕えている？親父や兄貴達に仕えた方がいいんじゃないのか？」

こんな役立たずな奴よりさ。と自虐気味に呟く。旅に出れば何か、分かると思っていた。でも現実には過酷で……自分は無力でしかなかった。

「……なんとなく……ですかね……」

「何となくって……」

「……アルフさまは私が選んだんですよ。だから間違いないんです！……まあそれもどうでもよいです！」

「いいのかよ!?!」

けっこうシリアスな話しをしていた筈なのに……セツナの空気の読めなさには中々のものだ。

「それよりも！その可愛い女の子は何なんですか？」

国家の遺跡をどうでもよいモノ扱いしたセツナは、蒼い髪の幼い少女を指さした。

「どこから、連れて来たんですか！はわあ！まさか誘拐ですか！？拉致ですかあ!?!」

「どどんテンションが上がっているセツナ。」

「違う！！勝手な妄想はやめろ!!」

「何と言つ事でしょう！私の主さまは、このようないたいけな幼女にお手をだされるとは！」

「そんなに溜まつてらっしゃるなら私がいつでも」

「まだ出してないし、出すつもりもねえよ！別に溜まつてもない！」

「！」

「そんなご遠慮なさらずに……野外でよろしければ今から……」

「ばっ！やめろ!!脱くなっ」

しばらくお待ち下さい

「……っていつ訳だよ……」

アルフはおおざっぱに先程の事をセツナに話した。

「……遺跡の中に……にわかに信じ難いですねえ……」

「つて言っても事実だ」

「……………ん」

少女が身じろぎをしだした。

「……………おっ」

「意識が戻ったみたいですね！」

「……………ここ……………どこ？……………あなたたちは誰？」

蒼い海を映し出したような美しい瞳。透き通るような声、美しいが硝子細工を思い出せるような無機質な声だった。

「……………ここは、ファルセル王国の北にあるアインダム荒地だ。俺は、アルフレッド…君は？」

私はセツナ・キリジヨウですようと云う声は無視して、アルフは問い掛けた。

「……………わからない……………何も覚えてない……………私は……………誰？」

「記憶喪失か？」

原因不明の病気の一つだ。

「……………何も……………覚えてない」

相変わらず感情のない声。だが少しでも表情が変わっていた。道に迷った女の子のような、そんな表情。

「心配するな……………記憶が戻るまで、俺が守ってやる」

「……………え」

少女は初めて、驚いたような感情のこもった声をあげた。

「とりあえず、セツナ。アンタ服もってないか？このままじゃまずいだろ？町に着いた何か買ってやるから、なんか渡せ」

「……………」

セツナは何かとても珍しい者を見たという表情をしていた。

「おい？セツナ？」

「えっ？ああはい！服なら予備がありますよ」

「じゃあ頼む…着替えさせてやってくれ」

「……………どうして…」

少女が消え入るような声で問い掛ける。

「……………どうして……………私に優しくするの?」

「……………さあ……………理由なんて要らないだろ?強いて言えば何と無くかな」

セツナの言葉を借り、アルフはそう言った。

「……………私には……………分からない……………」

「これから分かればいいだろ?」

「……………」

「さて、それじゃ着替えを……………えっと……………何てお呼びすればいいのでしょうか?」

「……………アルフが……………決めていい……………」

「えーいや……………いいのか?」

名前何てそう簡単に決めていいものなのだろうかと思っていると、

「……………(じくん)」

少女が頷いた。

「……………ちょっと考えさせてくれ……………」

「変なの付けちゃ駄目ですよ?」

「分かってる!……………でも急に言われてもな……………」

暫く頭を抱えるアルフ。

「……………ルリイて言うのはどうかな……………」

「ルリイ……………?」

「成る程!瑠璃ですか!ぴったりですね!」

「ルリイ……………私はルリイ……………」

何度も呟く少女。

「……………もしかして、気にいらないか?」

「……………(ふるふる)…………………………そんな事ない。

……………私はルリイ」

自分の名を呟いた少女は、ほんの少しだけ嬉しそうだった。

「……………アンタ…よく洋服なんて持ってたな…和服かと思ったぞ…
…」
白いフリルの付いた洋服だった。下は長め丈のスカートだ。セツナの予備の服らしいが、ルリイにはあつらえたように似合っているが、こんなファンシーな洋服はセツナには正直似合わないだろう。当のルリイは、何故か跳んだり跳ねたりしている。

「余計なお世話ですう！」

「サイズは？どうやって合わせたアンタとルリイじゃ体格が違い過ぎるだろ？」

「斬ったり、ちよつと裁縫しただけですよ？」

「アンタもけつこう器用だな…」

「女の子みたいに器用なアルフさまには及びませんよう〜」

「褒めてんのか？時間があれば、俺が仕立てるだけだな……………」

魔装具アラクネをメインに使つてるためか、糸の扱いは玄人レベルだ。一から服を仕立てる事も出来る。

「……………アルフ……………少し動き辛い……………」

「……………まあ……………無理矢理サイズを合わせたようなもんだからな……………町まで我慢してくれ」

「……………裸の方が動き安い……………」

「それだけは、止めてくれ！」

それで捕まるのは、間違いなくアルフだ。

「……………どうして……………？」

「いや……………真顔で言われても……………とにかく駄目だった」

とりあえず、常識から教えていかないなと思った。

「……………ん……………」

「……………どうした？」

それと同時に何か気配を感じる。

「……………マテリアバイズ……………」

「マテリア……………？」

「アルフさま！機械獣です！」

轟音と共に、砂地から巨人のような怪物が現れた。左手は、機械のソレだ。

「ぐごあああ　　！！」

「　　！ちっ！オウガか！」

Dクラスだが、その中でも厄介な部分に入る。

「……………」

機械獣を見てルリイの瞳が更に深く蒼に染まる。

「……………！」

先程の遺跡の出来事が脳裏に浮かぶ。直感的に

「　　ルリイ！」

アルフはルリイを抱き抱える。そして走り出す。

あの力を使わせてはならない。直感的にアルフはそう思ったのだ。

「うえ！？ちよつと！アルフさま！？」

「わりい！後頼む」

セツナを置いて逃走する。

「ぐるるる……………！」

「……………か弱い女の子を置いて逃げるなんて最低ですよ！アルフさま！」

もう見えなくなったアルフに文句を叫ぶ。セツナは振り向かない。

ゆっくりとオウガが近づいてくる。

「全く……………アルフさま女の子の気持ちなんて……………」

「……………があ！！」

「……………があ！！」

ひゅん。

風斬り音。それだけが響いた。セツナは振り向いてすらいない。目のいい者が居たら僅かにセツナの腕がぶれるくらいなら視認できた

だろう。

「ぐかあ！？」

「……………」

ずるり、と首がズレる。慌て抑えようとするが、

「はあ……………大体…アルフさまは……………」

ヒュンヒュン。

再び風斬り音。ぼとりと地面に落ちる音が響く。首、腕、上半身が順番に落ちた。

一秒にも満たない刹那の時間に切り裂かれていた。

視認すら不可まさに刹那の剣技だ。

「愚痴ってる場合じゃありませんね……早く追い掛けないと……」

もちろん、セツナは戦闘していたつもりはない。ただ自分に地近づ

いた障害を反射だけで廃除しただけなのだ。

のんびりと、アルフ達を追い掛ける事にセツナは決めた。

「行きますか！」

元氣いっばいにそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8540/>

蒼生のレジェンディア

2010年10月25日19時25分発行